

「信仰は死に勝つ」

ヘブライ人への手紙 11:17-31

2025年3月30日(主の日)

先月聞来ましたのは、アブラハムの信仰です。アブラハムは神に召し出されて、行き先も知らずに、旅へと出発しました。アブラハムは祝福してくださるという神の約束を信じたのです。祝福とは財産、特に土地が与えられること、その土地に生きる家族、子孫が増えることです。高齢で相続をする実の子供が一人もいなかったアブラハムとサラ夫妻に、年をとってから、約束どおりイサクという一人息子が与えられました。けれども、アブラハムは神がおっしゃったように星の数ほど海の砂の数ほど子孫が増えたのをみたわけではありませんでしたし、約束の地も与えられませんでした。それでもアブラハムは信仰に生きたのです。11:1によると「信仰とは、まだ見えていないけれど、望んでいることが本当に起こるというゆるぎない土台であり、それが本当だと信じられる確かなしるし」だからです。ここでいう信仰というのは、自分の心に思う信じる気持ちのことではありません。それはときに、「ほんとうかな。信じられないな」とあやふやなものになり、ときに失ってしまうものでもあります。けれども、この手紙において信仰とは、「まだ見えていないけれど、神が必ず約束を守ってくださる」ということの確信の土台なのです。どこに行くかわからず旅に出ることができるのも、結局は、約束の実現を自分が生きている間には見ることができず、手にもはいりませんでした。聖書の先祖たちは、信仰によって希望をもってこの地上を去ったのです。このように人は信仰によって、行き先を知らない旅を最後まで続け、その旅を希望をもったまま終えることができるのです。自分では見ることがなくても神が約束を守ってくださる、と信じて生き、信じて死んでいくのが信仰からです。

さて、今日の箇所ではアブラハムの話が続きますが、内容は違います。本日の段落は、信仰によって人生の大きな苦勞を乗り越えた人としてアブラハムを描きます。正確に言うならば、苦難を乗り越えることが目的ではありません。苦難があったとしても、信仰によって生きた。そういった方がいいでしょう。

わたしたちも人生において、苦難を経験します。痛い、苦しい、先のことが大変不安である。そういう直接的なこともあると思いますが、苦難が苦難なのは、理不尽に思えるからではないでしょうか。なぜ自分がこんな目にあわなくてはならないのか、いったい何の悪いことをしたというのか、と。少しでも神というものを知っていると思っていれば、「神さまは助けてくれない」とか「神などいない」と言ったりもするでしょう。そこで気をつ

けなくてはならないことは、苦しんでいる人におかして「それは神が与えた試練だからがんばって耐えましょう」などといってしまうことです。こんなことは大変乱暴なことで、苦しんでいる当事者に対して決して言うてはいけない言葉です。あるとすれば、すべてが終わった後に、「あれは神の与えた試練だった」と言えるかもしれませんが、それが許されるのも本人自身だけです。信仰とは人のことをどうこういうことではないからです。けれども、そこでなお、そこに自分に起こった苦難を信仰から理解した聖書の父祖たちがいたのです。やはりここで確かめておかないといけないことは、信仰とは、自分の気持ちや理解ではないので、神や、ましてや人に鍛えてもらう必要などないのです。そうではなくて、わたしたちには大祭司イエス・キリストの確かな贖いによって救われている、その救いの確かさをこの手紙では信仰と呼びます。このキリストは今も天で生きておられ、このキリストの執り成しによってわたしたちは生きています。そうでなければ 10:38,39 にあるように「信仰によって生きる」とか「わたしたちは、ひるんで滅びる者ではなく、信仰によって命を確保するものです」などとはとても言えないでしょう。

神に試みられるとするならば、それは信仰そのものではなくて、わたしたちそのものです。信仰を失ってしまったらならば、人生の苦難とは苦しく、理不尽で、絶望してしまうようなものです。けれども、信仰は、苦難に違う視点を与えます。硬い土地を苦勞して耕すことで豊かな土地になるように、あるいは、鉄は炎で焼いて叩くことで精錬されるようなものといえるかもしれません。それでもなお、苦難はわたしたちを絶望させます。

本日の箇所は、神にしたがって旅をする信仰者アブラハムから、試練を受けた信仰者アブラハムへとつなげていきます。創世記 22:1-9 に記されている試練のことです。「神は命じられた『あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。わたしが命じる山の一つに登り、彼を焼き尽くす献げ物としてささげなさい』」。

このアブラハムが直面した試練、そしてわたしたちが経験する最も過酷な試練は、なにかこれが通り過ぎれば自分は少し鍛えられるだろう、などというのんきな樂觀を持てるようなものではありません。自分に厳しくするタイプの単なるスポーツトレーニングと一線を画すのは、わたしたちは、人の死という苦難を経験するということです。それは愛する人の死であり、また自分の死でもあるかもしれません。アブラハムが直面した試練は、愛する自分の子が命を失うかもしれない、という試練です。わたしたちは、普段は、平穩無事な生活を望んでいます。苦難やまして死などは、あたかも自分に起こらないかのようにそれらの現実を直視しないで生きているのです。けれども、聖書はそのような現実から目をそむけません。神は人の死、自分の死かもしれないし、愛する人の死かもしれない、この現実を無視なさいません。命が問題だからです。「あなたは信仰によって生きる、信仰

によって命を得る」と言ってくれるのですから、その反対であり、神から離れる罪のまま、信仰がないなら必ず経験する死を無視することはできないのです。命が問題であれば死を考えないわけにはいかない。

もしアブラハムがこのことを人間的なまなざしでしかとらえられなかったとしたら、それは終わり、絶望、死しか見ることができなかつたでしょう。しかし、アブラハムは信仰によってこのことを見つめました。信仰は、神が約束をどのようにいつ、どこで実現されるかがわからないことをみとめます。自分の都合よく、自分の気持ちにそって神はことをなされないからです。けれども、信仰は、神は約束をまもってくれるという確信をわたしたちから失わせることはありません。信仰は「望んでいる事柄の確信(実質)」であり、見えないものを確証することを捨てることはありません。

それでもなお、病気や事故でもたいへんつらいのに、自分が息子をいけにえとしてささげる、というのは常軌を逸していると言わなくてはならないでしょう。アブラハムはここでは、信仰によってまだ見えていないものを望みみていた、と手紙の著者はいうのです。イサクが献げ物にする子羊はどこにいるのですかと質問したのに対して、アブラハムは「わたしの子よ、焼き尽くす献げ物の子羊はきっと神が備えてくださる」と答えます。これはアブラハムがのぞみみたことです。ヘブライ人への手紙の著者は、さらに進んで、アブラハムは神のご計画と約束、つまりイサクを通して子孫がたくさん与えられるという約束を信じていただけでなく、たとえここでイサクが死んだとしても、また命が取りも戻される、つまり復活の可能性をも望みみていた、と語ります。「アブラハムは、神が人から死者の中から生き返らせることもおできになると信じたのです」(19節)。実際にはイサクは死ななくて住みましたが、アブラハムにとっては、死者の中から返してもらったことと同然でした。

アブラハムはこの試練において、信仰を失わなかったし、信仰によってこの試練を乗り越えました。眼の前では、神はイサクを死から逃れさせてはくれませんでした。けれども、イサクには神が命を与えてくださるという目には見えない約束を信じたのです。けれども、アブラハムに約束されたことは祝福です。イサクの出来事を通してアブラハムはその完成を見ることなしに地上の命を終えました。

「アブラハムは主を信じた。主は彼の義と認められた」。これが神がアブラハムを祝福された根拠です。アブラハムは義とされた。神のもの、神の子とされたのです。その繁栄とは、アブラハムの肉親の子孫が増えることではなく、義とされた人たち、神の子供とされた人たちが増えることです。このことは、まことのいけにえの子羊、イエス・キリストによって成し遂げられたのです。アブラハムはすんでのところ一人息子を屠らずにすみ

ましたが、父なる神は、ほんとうにご自身の独り子イエス・キリストを十字架にかけて贖いのためのいけにえとしなくてはなりませんでした。もし神が本当にアブラハムにイサクを殺させたら、とんでもない神様だということになったかもしれません。けれども、神は御子の死を受け入れなければなりませんでした。イサクはころさせずにすみません。けれども、御子イエスは殺させられたのです。人間が御子イエスを十字架にかけた。神にかけさせたのです。十字架のこの残酷さを見つめる時、それは神がとんでもないのではなく、我々人間がとんでもないのです。十字架の残酷さは、人間の罪の悲惨さがいかにひどいかわらわしています。

けれども、神は、アブラハムにイサクを殺させなかったことよりもはるかに大きな御心により、御子を復活させられました。アブラハムはこの救いの成就を見ることはできないまま、しかし望みみながら地上をさりました。わたしたちは、この救いをすでに知っています。

話しをもどしまして、アブラハムはこの試練によって、神のご計画への信頼をますます確かにしました。このことは、イサクやその子らに伝えられていったのです。イサクは自分の二人の息子たちヤコブとエサウの祝福を祈りました。ヤコブが溺愛した息子ヨセフは、これまた兄弟に殺されそうになりますが、かろうじて売り飛ばされるだけですみ、エジプトに売られていきました。兄たちは、ヤコブに、ヨセフは獣に噛み殺されたと嘘をつきます。ヨセフはエジプトで生き延びて活躍し、兄たちを赦して迎え入れます。イスラエルの民を引き継いだこのヤコブもまた、死のまぎわに、死んだと思っていたのにエジプトで生き延びて立派になってかえってきたヨセフの息子たちのために祝福を祈りました。ここでも信仰は死の先に命があることを伝えます。

信仰のまなざしで困難を見たもう一人の人としてモーセをあげます。モーセの両親もモーセ自身もエジプトの王の恐怖の中を生きなくてはなりませんでした。ヘブライ人の子どもを殺すようにとの命令が出ていました。モーセもやはり命の危険の中にいたのです。けれども、両親はモーセを家に隠しました。恐怖の中にありながらも王の命令を恐れなかったのです。モーセはその後川にすてられて王女に拾われ、宮廷でそだてられますが、そこで優雅にすごすことを拒否し、神のご命令に従って、苦しみの中にある仲間のユダヤ人をエジプトの奴隷の地から導き出すことを決意します。「はかない罪の楽しみにふけるよりは、神の民と共に虐待されること選んだ」のです。結果として、キリストが罪から人を救うために十字架を決意なさり、ユダヤやローマの人たちからあざけりを受けた、その道と同じ道を歩んだのです。その報いは何なのか、モーセは理解していませんでしたし、生きている間に受け取ることもできませんでしたが、確かにそこにまだ見ぬ神のご計画の完成

を見ていたのです。そして、まだ見ぬ脱出、そしてさらには民の救いを望み見て、神のごめいれいどおりに過越の食事をし、子羊の血を柱に塗りました。モーセ自身は救い主キリストではありませんでしたが、過越の食事と子羊の血による過越は、キリストによって実現しました。とうぜんファラオはモーセと脱走した民の命を狙っていましたが、神はそこから救いだしてくださったのです。

いくら信仰によって苦難を乗り越えよう、などといわれても、人は死ぬのです。神が試練をお与えになるというのであれば、死を乗り越えることができなければ何の意味もないのではないのでしょうか。その意味では、わたしたちに与えられた信仰は確かに死の先に命があることを教えてくれます。信仰の父祖は最終点にはたどりつかなかったが、この手紙の相手、また現代のわたしたちはすでにキリストを知っており、その救いに預かっています。まだ救いの完成を見てはいませんが、死を超えるキリストの命にすでにあずかっているのです。